

文献学的研究と民族誌学的研究の結合と乖離

—1990年代までの西アフリカ・イスラーム研究の変遷

中尾 世治 *¹ 池邊 智基 *²
末野 孝典 *³ 平山 草太 *⁴

これまでの西アフリカ・イスラーム研究では、特定のトピックについてのレビューしか行われてこなかった。こうしたことを踏まえて、本稿では、西アフリカ・イスラーム研究の黎明期から1990年代までの研究の変遷を、文献学的研究と民族誌学的研究の結合と乖離という観点から明らかにすることを目的とする。そのために、18世紀から1990年代までの西アフリカ・イスラームについての研究を4つの時代に区分し、それぞれの時代区分における研究の特徴を述べる。まず、1910年代ごろまでの研究では文献学的研究が民族誌学的研究と結びついてきたが、1920年代から両者は分離していった。1950年代からは、それまでの植民地行政官=民族誌家の研究から、アカデミシャンによる研究への移行が始まり、アラビア語の写本の新たな「発掘」や口頭伝承の収集が精力的になされていった。その一部の研究では、文献学的研究と民族誌学的研究がふたたび、結びつくことになった。1980年代からは、植民地史研究とイスラーム史研究を横断するような共同研究が多く組織され、スーフィー教団やイスラーム改革主義運動が共通の研究対象となっていった。その一方で、アラビア語史料を用いる文献学的研究は下火となり、文献学的研究と民族誌学的研究が乖離することになっていった。こうした研究史は、すでに植民地統治時代については研究の対象となっているが、今後、独立後の時代もまた研究の対象となりうるであろう。

KeyWords

西アフリカ
イスラーム
イスラームの人類学
研究史

目次

- I はじめに
- II 1950年代までの西アフリカ・イスラーム研究
 1. オリエンタリストと探検家——文献学的研究と民族誌学的研究の交流（18世紀から20世紀初頭）
 2. 植民地統治期の行政官による研究——統治の学としての「黒イスラーム」研究（1910-1960）
- III アカデミシャンによる西アフリカ・イスラーム研究の勃興（1950-2000）
 1. イスラームとアフリカ社会の歴史的関係——ムスリム長距離交易商人研究とジハード研究（1950-2000）
 2. イスラームと政治経済——スーフィー教団、植民地行政、改革主義運動（1980-2000）
- IV 結論

I はじめに

本稿では、西アフリカ・イスラーム研究の黎明期から1990年代までの研究の変遷を、文献学的研究と民族誌学的研究の結合と乖離という観点から明らかにすることを目的とする。

先行研究では、本稿でまとめるようなタイムスパンのレビューが存在していない。人類学系の一部の研究をまとめた論文 (Saul 2006; Soares 2000, 2014)、イスラーム改革主義運動研究 (中尾 2016a, 2018)、クルアーンのアフリカ諸語への翻訳に関連する研究 (Tamari and Bondarev 2013)、アラビア語とアジャミーの文書の研究 (Kane 2016: chp. 1) については、それぞれ非常に有用なレビューがあり、本稿では言及しきれない膨大な蓄積を示している。しかし、これらのレビューは、西アフリカ・イスラーム研究の全体を示そうとするものではなく、個別的で限定的なものになっている。また、西アフリカ・イスラーム研究の大きな2つの構成要素である、アラビア語の文字史料に基づく文献学的研究と、同時代のイスラームの宗教実践についての、参与観察や語りの聞き取りによる民族誌学的研究との双方に目配りをしたレビューは存在しなかった。

ここで用いる文献学的研究という語はアラビア語の文字史料を用いる研究を指し、民族誌学的研究という語は同時代のイスラームに対する参与観察と聞き取りに基づく研究を指している。ただし、厳密な意味において、ここで用いる民族誌学的研究という語が、必ずしも学として整備された民族誌を成立させるものとしては用いていない。ここでは、依拠するデータが単に文字史料であるのか、参与観察と聞き取りであるのか、という差異によって、文献学的研究と民族誌学的研究をわけている。したがって、ここで言及する文献学的研究と民族誌学的研究が、時代を越えて、何らかの一貫性や蓄積を有しているとは想定していない。その意味において、便宜的な区分となっている。

しかし、両者の峻別は、西アフリカ・イスラーム研究の学説史を整理するうえで、2つの点において独自の意義を有して

いる。第一に、学問的な体系を構築してきたわけではない西アフリカ・イスラーム研究の蓄積と転換の整理に有用である。そもそも、西アフリカ・イスラーム研究は、特定のディシプリンをもたず、専門の学会が存在していない¹。そのため領域固有の方法論が展開せず、アラビア語の文字史料の読解や翻訳と、同時代のイスラームの宗教実践や語りの記述の蓄積とが事実上の傾向として生じていた。他方で、文献学的研究と民族誌学的研究への関心は、時代によって偏りを示しつつ変化している。そうしたことから、第二に、西アフリカ・イスラーム研究の傾向とイスラームをとりまく同時代の政治的なコンテキストとの結びつきを示すことが可能となる。すなわち、同時代の状況のなかで、植民地行政官や在来のイスラームの歴史の解釈を行い、あるいは、西アフリカの諸社会のなかでアラビア語の文字史料の社会的な位置づけが変化していったことがうかがえるのである。したがって、上記の研究関心の変化に注目してレビューすることによって、西アフリカ・イスラーム研究の学説史をまとめ、同時代の西アフリカの歴史との関連の仕方を副次的に示すことができるのではないかと考えている。

こうしたことを踏まえて、本稿では、特に文献学的研究と民族誌学的研究との関係に着目しつつ、おおまかに年代ごとの区分を設け、それぞれの年代における研究の方向性と代表的な成果についてのまとめを行う。はじめに、それ自体が研究対象となっている1950年代までの研究を概観し、次いで1950年代以降のアカデミシャンによる研究をまとめる。そして、1980年代までの研究の達成を示した後に、結論においてこれらの潮流の変化を概観し、1950年代以降の研究史がそれ自体として、今後、研究の対象となりうることを述べる。

II 1950年代までの西アフリカ・イスラーム研究

¹ 総合地球環境学研究所

² 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

³ 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

⁴ 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1 この点は匿名の査読者によって示された見解である。記して感謝申し上げます。

1. オリエンタリストと探検家

—文献学的研究と民族誌学的研究の交流 (18世紀から20世紀初頭)

西アフリカのイスラームを対象とした研究の起源は、少なくとも、18世紀までに遡る。たとえば、西アフリカ内陸をヨーロッパ人で初めて探査したマンゴ・パーク(Mungo Park, 1806年没)は、同時代の西アフリカ内陸のムスリムについての情報を書き残している。こうした探検家たちの系譜には、ルネ・カイエ(René Caillié, 1838年没)、ハインリッヒ・バルト(Heinrich Barth, 1865年没)、ルイ＝ギュスターヴ・バンジュール(Louis-Gustave Binger, 1936年没)などがあげられるであろう。彼らの旅行記は、西アフリカ内陸のイスラームを知るための代表的な歴史資料となっている(Park 1815; Caillié 1830; Barth 1857-1858; Binger 1892)。

他方で、こうした探検家たちが、アラビア語の文献を読むオリエンタリストたちの知識を有していたことも強調される必要があるだろう。のちの1970年代以降に出版された抄訳集に収められている、9世紀ごろから15世紀ごろまでの中東・北アフリカのムスリムの知識人による西アフリカ内陸の記述は(Cuoq 1975; Levtzion and Hopkins (eds. and trans.) 1981)、19世紀半ばには、一部のオリエンタリストたちにはすでによく知られていた。たとえば、ウィリアム・コーリー(William Cooley, 1883年没)は、中世のサハラ以北のアラビア語文献にあらわれる西アフリカ内陸の情報をまとめ、アル＝バクリー(al-Bakrī, 1094?年没)、アル＝イドリースィー(al-Idrīsī, 1165?年没)、イブン・バトゥータ(Ibn Battūṭa, 1368/9年没)、イブン・ハルドゥーン(Ibn Khaldūn, 1406年没)などの抄訳(Cooley 1966(1841))を出版している。こうしたオリエンタリストたちの知識は、西アフリカ内陸を旅する探検家たちにとって、前提となる知識であり、またそうした知識を更新することも、探検家たちの活動のひとつであった。たとえば、先述のバルトは、トンブクトゥの知識人によって書かれた『スーダーン年代記』について初めて紹介した人物である²。この「発見」

は、西アフリカで書かれたアラビア語の写本に基づく研究の起源として位置づけられるだろう³。

つまり、18世紀から19世紀までの探検家たちは、西アフリカ内陸についての同時代のいわば民族誌的な知識と、アラビア語文献によるオリエンタリストの文献学的な知識とを、ある程度共通してもち合わせていた。このようなアフリカニストとオリエンタリスト、あるいは民族誌学的研究と文献学的研究の交流は、20世紀の初頭ごろまで継続していた。

このような民族誌学的研究と文献学的研究をうまく組み合わせたものの代表は、西アフリカ民族学の父、植民地行政官＝民族誌家の泰斗モーリス・ドラフォス(Maurice Delafosse, 1926年没)にみてとれるだろう⁴。ドラフォスの代表作である、現在のマリとブルキナファソ、ニジェールをまたぐ広範な地域の、地理、民族、歴史をまとめた3巻本の『オー・セネガル・ニジェール』のうち、歴史を扱った第2巻では、口頭伝承の「スンジャータ物語」に加え、『スーダーン年代記』などの西アフリカのアラビア語文献を積極的にとり入れた統合的な歴史叙述を行っている(Delafosse 1912)。

また、ドラフォスは、オリエンタリストで義父のオクターヴ・ウダ(Octave Houdas, 1916年没)とともに、『スーダーン年代記』(*Ta'riḫ al-Sūdān*) (trad. par Houdas 1900)、『忘れられたことについての備忘録』(*Tadhkirat al-Nisyān*) (trad. par Houdas 1901)、『探求者の年代記』(*Ta'riḫ al-Fattāsh*) (trad. par Houdas et Delafosse 1913)といった、代表的な歴史書をアラビア語テキスト付きの対訳として出版している。これらの歴史書は、西アフリカの歴史研究とイスラーム研究に、大枠となる歴史観を提供したという点で重要なものとなっている⁵。

しかし、こうした文献学的研究と民族誌学的研究の組み合わせは、1910年代ごろに頂点に達し、それ以降は西アフリカのイスラーム研究のなかでは、みられなくなっていく。あまり知られていないことであるが、この伝統はフルベ研究のなかで継続する。のちに、フルベ研究の大家となるアンリ・ガダン(Henri Gaden, 1939年没)は、在地のイスラーム知識人に

2 なお、バルトの『スーダーン年代記』の読み方の偏りは、のちの時代にまで大きな影響を与えることになった(Moraes Farias 2006)。

3 他にも、大西洋奴隷貿易によって、アメリカ大陸に渡ったムスリムによって書かれた文書があり、近年もその「発掘」は続いている(たとえば、Curtin (ed.) 1967; Austin 1997)。

4 オリエンタリストとしてのドラフォスの位置づけについては、アムセルとシブーの論集(Amselle et Sibeud 1998)に詳しい。

5 たとえば、アスキヤ・ムハンマドの統治期をソンガイ王国の絶頂期とみなし、サアド朝モロッコの征服以降を衰退期とみなすという歴史観は、ドラフォス(Delafosse 1912)、トリミングム(Trimingham 1962)、レヴツィオン(Levtzion 1973)などに引き継がれ、大きな影響を与えた。しかし、こうした歴史観が、17世紀のトンブクトゥにおいて短期的に出現した年代記ジャンルの記述スタイル(Moraes Farias 2008)や、特定のイスラーム思想に基づくものであること(Nobili and Mathee 2015)に留意が必要である。本特集の「西アフリカ・イスラーム研究の新潮流——教団、思想、言説的伝統」のIV「アラビア語資料群を用いた歴史学・イスラーム思想史研究」を参照。

アラビア語で当地の歴史の執筆を依頼し、その翻訳を『フータ・セネガル年代記』(*Chroniques du Foûta sénégalais*) (trad. par Gaden 1913)として出版している⁶。また、フルベ研究者のジルベール・ヴィエイヤール(Gilbert Vieillard, 1940年没)は、フルベ語の口頭伝承の転写とともにアジャミーの研究を行い、1938年に設立されたIFAN (Institut français d'Afrique noire; フランス黒アフリカ研究所)⁷で本格的な研究に入っていたが(たとえば、Vieillard 1937)、1940年、第二次世界大戦の従軍中に死去し、その多くはメモとして残されたまま出版されなかった(Malon 2000)。いづれにしても、西アフリカのイスラーム研究のメインストリームから、アラビア語の文献を読み進めていく研究は少なくなっていくことになる。こうした研究では、アラビア語史料と口頭伝承の内容を並立させるように組み合わせていたものとして評価できる。しかし、そこでは必ずしも理論化が試みられてこなかった。このこともまた、アカデミックな研究として、そのまま展開しなかった理由となるだろう⁸。

2. 植民地統治期の行政官による研究

——統治の学としての「黒イスラーム」研究 (1910-1960)

1920年代以降の西アフリカ・イスラーム研究は、ポール・マルティ(Paul Marty, 1938年没)とジョセフ＝ジュール・ブレヴィエ(Joseph-Jules Brévié, 1964年没)といった植民地行政官＝民族誌家が代表的である⁹。

マルティは、西アフリカのムスリムには高度なイスラームの知識がなく、在来宗教との混淆によって成り立っているという「黒イスラーム」論を展開し、イスラーム神秘主義教団(以下、スーフィー教団)のヒエラルキーを活用した統治を主張していた(Triaud 2000)。そうした主張を補強し、仏領西アフリ

カのムスリムの有力者たちを中心とした各植民地のイスラームについての情報をまとめた研究書がマルティによって書かれている(Marty 1920-1921, 1921a, 1921b, 1922, 1930)。これらの書籍は、地域や関心の偏りが大きいものの、それぞれの地域の有力なムスリムについての情報の総覧として、現在でも史料的な価値をもつものとなっている。

マルティに比べて、ブレヴィエの著作(Brévié 1923)は、ムスリムと非ムスリムとの関係、非ムスリムへのムスリムの影響により焦点化したものとして、理解できるだろう。「ナイーブな」非ムスリムが「狂信的な」ムスリムの影響を受けやすく、反フランス的になりやすいといった当時の植民地行政官の一般的な見解が示されている。

現在の地点からみると、ブレヴィエの著作は民族誌的な記述がほとんどないという点で学問的な価値は薄いが、1950年代ごろまでの「黒イスラーム」論の代表的な著作であり(Triaud 2000: 175-176)、一定の影響力をもっていた。たとえば、1941年のオート・ヴォルタ植民地のボボ・ジュラソにおけるホテル襲撃事件で白人がムスリムに殺害された際には(中尾 2016b)、ブレヴィエの著作が事件の総括に援用されている¹⁰。

こうしたマルティやブレヴィエの著作を中心とするフランス語圏の研究では、スーフィー教団、あるいは在来の「アニミスト」とムスリムの関係に焦点があてられた。他方でナイジェリアを中心とした英語圏においては、フレデリック・ルガード(Frederick Lugard, 1945年没)によって定式化された間接統治のもとで、イスラーム諸王国・諸首長国を主たる対象・単位とした研究、とりわけ歴史研究が進められていた¹¹。その中心となり、また植民地統治期になされた後続の研究の方向性に大きく影響を与えたのは、リッチモンド・バルマー(Richmond Palmer, 1958年没)によるボルノ・ハウサの諸王国の歴史研究である(Palmer 1908, 1967(1928), 1936)。バルマーは、1904年の着任以来、北部ナイジェリア

6 ただし、この原本は残っていない。ガダンについても、一定の研究がなされているものの(Pondopoulo 2002; Dielly 2007)、アフリカの知識人と植民地行政官＝民族誌家による知識の生産という観点から、さらなる研究が必要とされている。

7 1966年に、IFANは黒アフリカ基礎研究所(l'Institut fondamental d'Afrique noire)と改称している。

8 この点は、フランスの人類学・民族学のなかで、ドラフォスらの植民地行政官＝民族誌家の研究が評価されなかったことと、一定程度関連しているであろう。竹沢は、モースがドラフォスを評価していなかったことを指摘し、その理由として、ドラフォスが綿密なフィールドワークを行わなかったことや通時的視点に強調をおいていたこと、さらに人類学・民族学がヨーロッパ社会との顕著な差異を示す社会を過剰に評価していたことを述べている(竹沢 2001: 144-145)。このことは、仏語圏の西アフリカ・イスラーム研究がフランスの人類学・民族学と有機的に結びつかなかったことと関連している(竹沢 2001: 149-150)。

9 彼らの研究とイスラーム政策への影響については、ハリソンとトリオが詳細に論じている(Harrison 1988; Triaud 2000)。

10 Centre National des Archives du Burkina Faso 44V96 Lettre du Gouverneur de C. I. aux Inspecteurs des affaires administratives, le 20 octobre 1941.

11 植民地期ナイジェリアにおける学術研究の担い手の変遷、およびそれに伴う研究の方向性の変遷については、自身も植民地行政官であり後に人類学者に転じたグウィリム・ジョーンズ(Gwilym Jones, 1995年没)の回想が詳しい(Jones 1974)。

にて植民地行政官として断続的にキャリアを積みつつ、この地域に存在する諸王国の歴史を記述しようとする試みを続けていた¹²。彼はその土地の「現地人エリート」の協力によって得られた膨大な口頭伝承や文字史料を用いて研究を進めていた。こうしたバルマーの歴史記述は、間接統治という統治の制度上の関心のみならず、歴史記述を通じて自身の任地の重要性・独自性を強調しようとする行政官の思惑と、歴史記述によって自身の支配の正統性の担保を目指す現地の政治エリートの思惑とが一致してなされた、まさに両者の「共同事業」(Hiribarren 2013) というべきものであった。バルマーによる歴史記述のあり方は、英領における行政官によるイスラーム王国史・首長国史研究のひとつの典型として位置づけられる(たとえば、Hogben 1930)¹³。さらに、現地に伝わる口頭伝承や文字史料を用いた歴史研究への関心の高さは、スミス(H. F. C. Smith, 没年不明)の研究(Smith 1961)などとあわせて、1970年代以降のアカデミシャンによる歴史研究の深化を準備したといえる。

このように仏領と英領においては、統治を行う単位と関心が異なっており、これに伴うイスラーム国家の残存状況の違いは、両地域におけるイスラーム研究の対象の違いをもたらした。それぞれ一部の有力者やエリートに関心を集中させる点では共通しつつも、仏領においてはスーフィー教団、英領においては間接統治のもとで残されたイスラーム国家が、主たる研究の対象・単位となっていた。

しかし、中東・北アフリカのイスラームの影響を受けたとみなされていたイスラーム改革主義運動に対する統治上の関心が高まることによって、1950年ごろから大きな変化が生じた。イスラーム改革主義運動が治安攪乱の要因として捉えられたのである。そうした視点を持った研究の具体例として、ムスリム事情局(Bureau des Affaires Musulmanes)などの仏領西アフリカのムスリムの統治に関わっていた植民地行政官であるマルセル・カルデアール(Marcel Cardaire, 没年不明)、博物学者でIFANの初代所長であったテオドール・

モノにかわって第2代所長をつとめたイスラーム学者のヴァンサン・モンテユ(Vincent Monteil, 2005年没)などによる研究がある(Cardaire 1954; Monteil 1980(1964)など)。

モンテユの研究は、全体としての記述の枠組みが「アニミスト」とのシンクレティズムというテーマを脱していないが、同時代の政治経済状況のなかで変容する西アフリカのイスラームの状況を描き出している。たとえば、ジーンズを履き、アフロヘアを楽しみ、ビートルズを聞き、ダンスを嗜む都市の若いムスリムたち(Monteil 1980: 396-398)や、マルクス主義政党とイスラームとの重なり合いと緊張関係(Monteil 1980: 403-418)を記述している。こうしたグローバルな変化や現代政治とイスラームの関係について、1950年代からなされるアカデミシャンによる同時代の研究は、ほとんど論じてこなかった¹⁴。

モンテユは、最後の植民地行政官=民族誌家のひとりであり、基本的には研究全体をつらぬく理論的な枠組みをもつことはなかった。1960年のフランス語圏西アフリカ諸国の独立を機に、こうした研究はモンテユを最後に姿を消した。統治のための情報収集という関心を基礎にしていた記述的なあり方によって、現在の時点からすると、これらの研究がいささか古めかしい研究であったことは否めない¹⁵。しかし、のちに述べるアカデミシャンによる研究が、しばしば同時代の状況への関心を失っていたことを踏まえると、こうした植民地行政官=民族誌家の同時代人としての記録は、今後の研究による再読を待っているように思われる。

Ⅲ アカデミシャンによる 西アフリカ・イス ラーム研究の勃興 (1950-2000)

12 バルマーの行政官としての経歴の概要については Kirk-Greene (1980: 220) を、学説史的位置づけの詳細については Hiribarren (2013: 88-91) を、それぞれ参照されたい。

13 北部ナイジェリアの首長国史の総覧である Hogben (1930) には、バルマーが序文を寄せているほか、情報提供者として謝辞にもバルマーの名があげられている(Hogben 1930: vi, xiii-xiv)。この著作は後に増補改訂版が出版されているが、この出版にはナイジェリア北部州政府からの後押しがあり(Hogben and Kirk-Greene 1993(1966): v)、ナイジェリア連邦首相アブーバカル・タファワ・バレワの序文が寄せられていることから、後述する独立期の政治的状況と研究動向との関連を示す例としても興味深い。

14 1974年のカバによるイスラーム改革主義運動研究が唯一の例外である(Kaba 1974)。この研究の意義については、中尾(2016a: 123)を参照。

15 ただし、独立後も IFAN は、フランス語圏西アフリカのアラビア語とアジャミーの文書の集積地と研究拠点となっており、その整理作業においても、モンテユは大きな役割を果たしている。IFAN のこれまでの研究蓄積はカン(Kane 2016: 31-34)、近年の資料調査の一次報告についてはノビリ(Nobili 2016)を参照。

1. イスラームとアフリカ社会の歴史的関係

—ムスリム長距離交易商人研究とジハード研究 (1950-2000)

おおまかにいえば、西アフリカを対象としたフランスの人類学は、イスラームを正面から扱ってこなかった。西アフリカをフィールドにしていたフランスの人類学では、マルセル・グリオール(Marcel Griaule, 1956年没)らの研究がドゴンを中心とした在来宗教の研究に注力しており¹⁶(グリオール1981(1948); グリオールとディテルラン1986(1965))、植民地状況下の西アフリカ社会の動態に焦点化したジョルジュ・バランディエ(Georges Balandier, 2016年没)もキリスト教の宗教運動を対象としていた¹⁷(バランディエ1983(1955))。

そうしたなかで、西アフリカ・イスラーム研究の新たな方向性は英語圏から発せられた。最初の代表的な研究者は、スペンサー・トリミングム(Spencer Trimingham, 1987年没)である。イングランド国教会の宣教師であったトリミングムは、英国聖公会宣教協会(Church Missionary Society)とメソジスト宣教教会(Methodist Missionary Society)の資金援助によって1952年に行った西アフリカでの現地調査に基づいて、『西アフリカにおけるイスラーム』(Trimingham 1959)を書き上げ¹⁸、さらに、それを発展させた『西アフリカのイスラーム史』(Trimingham 1962)を著している。

これらの著作は、いわゆるジハード史観としてのちに批判的にまとめられる、西アフリカのわかりやすい歴史観を提示

したという点で評価できるだろう¹⁹(竹沢1988, 1990; 坂井2003)。おおまかにいえば、長距離交易商人のムスリムが西アフリカに定住し、その後には在来宗教から王族が改宗し、最後にジハードによってマジョリティがムスリムとなる、という歴史観である(Trimingham 1959, 1962)。坂井が指摘するように(坂井2003: 13-17)、こうした歴史観は、後年の研究にまで大きな影響を与えた(Levtzion 1979, 2000; Fisher and Fisher (eds.) 1973, 1985; Hiskett 1984)。

他方で、トリミングムの研究は、それ以前になされてきた西アフリカのイスラームと在来宗教の研究をまとめあげた点で重要性があるといえるだろう。たとえば、彼の研究は、フランス語圏のドラフォス、英語圏のパルマーを代表として、英仏語圏の研究を多く参照している。その意味では、英仏語圏の個別研究を統合するかたちで、わかりやすい類型化を行ったとまとめられるだろう。トリミングムの影響かどうかは不明であるが、1960年代以降、西アフリカ・イスラーム研究を大きく牽引していったのは英語圏の研究であった²⁰。

1960年代以降の研究を大きく分類すれば、ソングイ王国以前の歴史研究と一部で連動していたマンデ系ムスリム商人の研究と、18世紀以降の西アフリカ各地で生じていたジハードの研究にわけられる²¹。まず、前者について触れていこう。

マンデ系ムスリム商人の研究は、現在のガーナ、ブルキナファソ、コートディヴォワールにまたがるヴォルタ川流域を対象として研究が深化していった²²(Wilks 1961, 1968, 1989, 2000; Wilks et al. 1986; Levtzion 1968, 2000)。これらの

16 グリオールは、周囲の集団から隔離されたドゴン像を描いていたが、実際には、イスラームやキリスト教の影響を大きく受けていた(Brenner 1984; 坂井1986; Tamari 2001; van Beek 2004)。

17 ただし、このことはフランスの人類学のメインストリームに限定される。たとえば、前節で言及した植民地行政官=民族誌家のカルデルとフルベの民族学者=著述家であったアマドゥ・ハンバテ・バによる『チュルノ・ボカール——バンジャガラ賢者』(Bâ et Cardaire 1957)は、西アフリカのイスラーム神秘主義の知識人であるチュルノ・ボカールの生涯と教えをまとめたもので、ある種の民族誌としても位置づけられる。あるいは、ローカルな歴史の研究のなかでも、イスラームに関連する重要な研究はなされていた。西アフリカの代表的な植民地行政官=民族誌家であるシャルル・モンテイル(Charles Monteil, 1949年没)のジェンネについての研究(Monteil 1903, 1971)は、現在でも参照に足る貴重な報告であるほか、その他の細かな歴史研究もなされている(Saint-Père 1929; Rougier 1930)。

18 宣教師であったトリミングムは、イスラームをキリスト教に先行するモデルとして捉えており、彼の著作からはイスラームがアフリカの文化に融合していることへの「羨望」と、キリスト教が排除されていることへの落胆とのあいだで振れていることを読みとることができる(Tayob 2004: 237)。

19 『アフリカ研究』誌上で、竹沢と嶋田によってなされた、いわゆるトリミングム論争は、1960年代と1970年代の西アフリカのイスラーム研究と、トリミングムの著作とがどのような関係に位置づけられるのかという点をめぐって、正反対の主張が交わされた(竹沢1988, 1990; 嶋田1988, 1991)。現在の時点からみると、この論争は日本の西アフリカ・イスラーム研究の草創期において、主として英仏語圏でなされた1960年代と1970年代の研究成果の広範な紹介としての歴史的な役割を果たしたとして捉えられる。

20 1960年代以降、特に、イバダン大学とロンドン大学東洋アフリカ研究学院(the School of Oriental and African Studies; SOAS)を中心に研究が大きく進展した。この時代の研究の展開については、ウィリス(Willis 1971)が詳しくまとめている。

21 これらの研究を横断するかたちで、主に西アフリカのイスラームを対象とした論文集が、1960年代以降に出版されている(Lewis (ed.) 1966; Fisher and Fisher (eds.) 1970; Levtzion(eds.) 1979; Levtzion and Fisher (eds.) 1987; Willis (ed.) 1979, 1985)。これらの論文集を通して、西アフリカ各地のイスラームの受容や、奴隷制を含むムスリムと非ムスリムの関係、スーフィー教団についての事例研究が蓄積されることになったことも1960年代以降の大きな進展である。

22 本文ではとりあげられなかったが、サハラにおける学術・商業のネットワークやハウスによる長距離交易の研究も、この時代に大きく進展し、現在まで継続的に研究が進められている(たとえば、Stewart 1976; Lovejoy 1980, 1983, 2005; McDougall 1983; 私市2004; Lydon 2009; McDougall and Scheele (eds.) 2012; 荻谷2012)。

地域では、それ以前には、イスラームを主題とした研究がほとんどなされてこなかったため、アラビア語の写本や口頭伝承の「発掘」という点でも画期的なものであった。特に、1953年から哲学講師としてゴールドコースト大学（現、ガーナ大学）に赴任し、1971年にノースウェスタン大学に異動するまで勤務していたアイヴォア・ウィルクス(Ivor Wilks, 2014年没)が、ヴォルタ川流域のイジャーザ(教授免状)を精力的に収集し(Lawler 1996; Wilks 2011)、アルハジ・サリム・スワレ(al-Hajj Salim Suwari)に遡るとされる「平和主義的な」マンデ系ムスリムの知的ネットワークを明らかにしたことで(Wilks 1968)、のちの研究を大きく進展させた。

また、こうした研究のなかで最も大きな貢献は、ウィルクスとネヘミア・レヴツィオン(Nehemia Levtzion, 2003年没)らが、マンデ系ムスリム商人のいわゆる「平和主義」——王権などの政治勢力には直接的に関与せず、王権に対して護符や呪術を提供することで、王権からの庇護を得るという互惠関係——を定式化した点にあるだろう。こうしたムスリムと非ムスリムの互惠関係は、西アフリカのほかの地域においてもみいだされ(たとえば、Launay 1982; 坂井 1985, 1987; 竹沢 1988, 1990; Sanneh 1979)、西アフリカのイスラームについての一定の共通理解をもたらしたといえるだろう。

レヴツィオンやウィルクスの一部の研究は(たとえば、Wilks 1968; Levtzion 1968, 1973)、アラビア語の文字史料に書かれている内容を、同時代のムスリムの宗教実践や語りといった民族誌学的研究で補って理解するという点で、ドラフォスらとは異なるかたちで文献学的研究と民族誌学的研究の融合をなしたといえるだろう。それらはアラビア語の写本と口頭伝承の双方を一次資料として用いた研究を行っていただけでなく、ムスリムと王権の関係のモデル化などの一定の理論構築を行っており、そこにはフィールドワークの成果が反映されていた。

他方で、英語圏におけるジハード研究も1960年代以降大きく進展した。フランス語圏における研究と比較すると、その

差は顕著である。フランス語圏の研究は、広範な口頭伝承の収集とその組み合わせによって成立していた。アマドゥ・ハンパテ・バ(Amadou Hampâté Bâ, 1991年没)とジャック・ダジェ(Jacques Daget, 2009年没)によるシェイク・アマドゥ(Cheikhou Amadou/Ahmad b. Muhammad Lobbo, 1844/5年没)のマーシナ帝国の研究は口頭伝承によってのみ再構成され(Bâ et Daget 1962(1955))、イヴ・ベルソン(Yves Person, 1982年没)によるサモリ・トゥレ(Samory Touré, 1900年没)のサモリ帝国の研究(Person 1968, 1970, 1975)は口頭伝承と征服期・植民地統治期のフランス語の行政文書によって再構成されている²³。これらの研究はジハードの社会的な意味を明らかにするとともに、大量の口頭伝承の収集によって歴史的な出来事を措定していったという点で重要な研究であった。しかし一方で、ジハード運動のなかで展開していたイスラーム思想の内在的な理解には欠いていた。

これに対して、マーヴィン・ヒスケット(Mervyn Hiskett, 1994年没)やマレイ・ラスト(Murray Last)らによるウスマン・ダン・フォディオ(Usman dan Fodio, 1817年没)とその後継者のソコト・カリフ国の研究(Last 1967; Hiskett 1973)、ジョン・ウィリス(John Willis, 2007?年没)によるアル=ハーツジ・ウマル・タル(al-Hājj 'Umar Tal, 1864年没)のトゥクロール帝国の研究(Willis 1989)では、アラビア語の史料を駆使して、歴史的な出来事の特定制やイスラーム思想の展開が論じられるようになっていた²⁴。特に、ヒスケットによるハウサ語のアジャミー²⁵の研究は、イスラーム思想がハウサ文化のなかにかに受容されてきたのかを示した先駆的なものとして位置づけられる(Hiskett 1975)。

アラビア語の新史料の「発掘」という点では、マリのトンブクトゥなどを中心に活動していたジョン・ハンウィック(John Hunwick, 2015年没)の業績を無視することはできない。ハンウィックは、1960年から1967年までイバダン大学に勤務しながら、1962年に同大学にアラビア語史料センターを設立

23 嶋田によるカメルーン北部のアダマワのジハード研究は(嶋田 1995)、この系譜に位置づけられる。嶋田のジハード研究の大きな達成は、西アフリカの都市化の進行とともに、ウシの経済価値が上昇し、フルベの定住化や国家形成運動の経済的な基盤をなし、牧畜民として有していたリネージの分節による権力の分散を乗り越えたことを、同時代の口頭伝承と植民地統治期のフランス語の行政文書を用いて説得的に論じた点にあり、日本の西アフリカ・イスラーム研究の独自の達成である。

24 ラスト(Last 1980)は、カノ年代記を事実の特定から離れて、歴史についてのメタファーなどの側面から論じた研究として先駆的なものである。

25 アジャミーとは、アラビア語で「非アラビア語話者」を意味する「アジャム(ajam)」に由来し、西アフリカの文脈では、アラビア文字で書かれたアフリカの諸言語(ハウサ語、フルベ語、ウォロフ語が代表的)のことを意味する。西アフリカにおけるアジャミーの歴史的展開については、Ngom (2009: 99-103)およびSouag (2010)を参照。「アジャミー化」やアジャミーの研究については、本特集の「序」と「西アフリカ・イスラーム研究の新潮流——教団、思想、言説的伝統」のIV「アラビア語資料群を用いた歴史学・イスラーム思想史研究」を参照。

し、1970年代からはトンブクトゥのアフマド・バーバー・センターでのアラビア語の写本の整理作業にも参与してきた²⁶。多様な研究トピックを開拓していったハンウィックの研究の包括的なレビューは困難であるが、新たなアラビア語史料の読解を通じたソングイ王国の歴史研究(Hunwick 1966)や、特に、一説には15世紀末から16世紀初頭の西アフリカにカーディリー教団を導入したといわれる、イスラーム知識人マギーリー²⁷ (Muhammad b. 'Abd al-Karim al-Maghili, 1505年ごろ没)がソングイ王国の王アスキヤ・ムハンマド(Askiya Muhammad, 1538年没)に応えたファトワー集についての著作(Hunwick 1985)が、ハンウィックの中期の重要な研究として位置づけられる。

トリミンガムの研究による転換を経て、1960年代に執筆活動を開始した上述の西アフリカ・イスラーム研究の代表的な論者は、大雑把にまとめれば、西アフリカにおけるイスラームの定着と在来の諸社会との関係を論じていたといえる²⁸。これには、彼らの研究の主題が、イスラームの初期の拡散やかつての王国といった植民地統治以前の歴史に集中していたことも関連しているだろう。さらにいえば、こうした歴史への関心の集中は、脱植民地期や独立直後といった同時代の政治状況と関連していたように思われる。

たとえば、この時代の新しい西アフリカ・イスラーム研究を牽引していたウィルクスやハンウィックは、西アフリカの大学に所属し、教育・研究活動を行っていた。ウィルクスは1953年から1971年までガーナ大学で教鞭をとり、ハンウィックは1960年代にナイジェリアのイバダン大学に、1970年代にはマリのアフマド・バーバー・センターに所属していた。特に、1960年代のガーナ大学には、アフリカ各国の自由化運動の活動家があつまっており、西アフリカを対象とするイスラ

ム史研究者との交流も一部にあったという証言がなされており(Moraes Farias and Rossi 2018: 500)、独立後の熱気を有した研究の盛り上がりを感じさせる。また、1960年代ごろには、イバダン大学のアフリカ学研究所(Institute of African Studies)・アラビア語資料センター(The Centre of Arabic Documentation)の『研究紀要』(*Research Bulletin*)が、IFANの『紀要』(*Bulletin d'IFAN*)とともに、新たな一次資料の報告という点で、英仏米での出版物にまったくひけをとらない成果をあげていた²⁹。こうしたことを考慮すると、独立前後のアフリカ諸国の大学は新たな知の拠点を形成していた可能性があるといえるだろう。ここではあくまで例示しかできないが、脱植民地期や独立直後の時代になされた研究も、今後研究対象となるだろう³⁰。

議論がやや脇道にそれてしまったが、いまいちど、ムスリム長距離交易商人研究とジハード研究についてまとめておこう。これらの研究における中心的な主題は、ムスリムと非ムスリムがどのような社会関係を構築してきたのか、西アフリカのイスラーム国家がどのような思想をもとに構成されてきたのか、といったものであった。こうした研究は、西アフリカのムスリムによって書かれた、アラビア語やアジャミーの写本の「発掘」と読解を進めていき、西アフリカのイスラーム史の大きな枠組みを構築していった。2000年代後半以降、アラビア語やアジャミーの写本の集中的な読解による研究が急増していくのだが、ここでまとめた研究群を踏まえて進展したものとして理解することができる³¹。

2. イスラームと政治経済

—スーフィー教団、植民地行政、改革主義運動(1980-2000)

26 ハンウィックを追悼した2015年のイバダン大学広報記事を参照。[http://bulletin.ui.edu.ng/sites/default/files/ui_bulletin_18May2015_1.pdf, 2020年1月29日最終閲覧。]

27 西アフリカにカーディリー教団の教えが広まる過程で重要な役割を果たしたのはクンタと呼ばれる集団であるが、彼らにその教えを伝えた最初の人物が誰であるのかについては、研究者のあいだで幾つか見解がわかれている(Marty 1920: 2, 20-21; Batran 1979: 120; Whitcomb 1975a: 108; 1975b: 409)。したがって、西アフリカにおけるカーディリー教団の伝播の起源を特定することは困難である。

28 在来の社会の論理からイスラームの定着を論じたものとしては、竹沢(1988, 1989, 1999, 2008)があげられる。これらの研究では、19世紀以前においては非ムスリムであった、現在のマリのニジェール川川氾濫原の漁撈民のボゾが、伝統的な象徴体系や漁法と、イスラームの実践とをどのように接合させていったかを明らかにしている。

29 この点については、1960年代のアフリカのイスラーム史研究を概観したウィリス(Willis 1971)がとりあげている文献を参照。

30 脱植民地期や独立後のコンテクストを踏まえると、その同時代になされていた研究にこれまでとは異なる意味をみだすことができる。このことについては、川田順造の著作とアフリカ史研究をとりあげて部分的に論じた(中尾 2019)。

31 主たる研究成果の刊行が2000年代以降となったが、アラビア語の史料を用いた、この世代の重要な研究者としては、パウロ・ド・モラエス・ファリアス(Paulo de Moraes Farias)があげられる。マリのガオとその周辺の墓碑研究を中心として、16世紀以前のニジェール川中流域の政治変動を微細に明らかにしている(Moraes Farias 1967, 2003)。また、特に、『スーダン年代記』などの「年代記」(ta'rikh)というジャンルが特定の時代にしか出現していなかったことを指摘した論文は(Moraes Farias 2008)、この時代のアラビア語史料の読解に大きな影響を与えている。「年代記」というジャンルについては、本特集の「西アフリカ・イスラーム研究の新潮流——教団、思想、言説的伝統」のIV「アラビア語資料群を用いた歴史学・イスラーム思想史研究」を参照。

1980年代後半ごろから、植民地統治期、あるいは独立以後のイスラームに焦点をあてた研究が増加するようになる。これらの研究は、類似した研究対象を扱いつつも、異なる問題関心で進められ、1980年代後半から1990年代に、共同研究や論文集を通じて合流することになった³²。

特に、セネガルのスーフィー教団を対象に、1970年代から1980年代にかけて、植民地統治以降の政治経済状況の変化を踏まえた研究が盛んになる。ドナル・クルーズ・オブライアン(Donal Cruise O'Brien, 2012年没)、クリスチャン・クーロン(Christian Coulon)、ジャン・コパンス(Jean Copans)の著作がよく知られている。論者によって強調点の差はあるが、おおまかにいえば、植民地統治以前のウォロフ社会の階層構造とスーフィー教団のイデオロギーが、植民地統治以降の政治経済状況に適応していき、セネガルの国家レベルに影響を与えるようになったことが論じられている³³ (Cruise O'Brien 1971, 1975; Copans 1980; Coulon 1981, 1983)。西アフリカ・イスラーム研究の研究史のなかで、重要な点は、植民地統治期の行政文書を批判的に読みとく研究が登場し³⁴、スーフィー教団の宗教的な「エリート」ではなく民衆のイスラームを対象に組み込み、そのうえで、スーフィー教団を国家と民衆の媒介項として捉えたことにあるといえるだろう³⁵。

こうした研究を踏まえた最初の達成は、論文集『アフリカのイスラームにおけるカリスマとスーフィー教団』(Cruise O'Brien and Coulon (eds.) 1988)である。この論集=共同研究には、ナイジェリア北部のイスラーム史を研究していたラストや、ティジャーニー教団からわかれたハマウイー教団に属したチェルノ・ボカール(Tierno Bokar, 1939年没)の思想研究(Brenner 1984)に着手していたルイス・ブレンナー(Louis Brenner)、サヌーシー教団やティジャーニー教団

の歴史的な展開の研究を行い、1980年代以降のフランス語圏西アフリカのイスラーム研究を牽引してきたジャン＝ルイ・トリオ(Jean-Louis Triaud)、ブルキナファソのイスラーム改革主義運動研究にいち早く着手したルネ・オタイェク(René Otayek)らが参加している。

ここでは、スーフィー教団のイデオロギーが創始者の奇跡やカリスマを下支えし、そのイデオロギーが教団の組織原理を構成し、制度化するという見立てが示されている。先行する世代に比べ、比較研究が一定程度可能になったため、共通する原理がそれぞれの個別状況に応じて、異なる様態であらわれることが示されている。たとえば、この論集で唯一イスラーム改革主義運動をとりあげたオタイェクは、ブルキナファソではカリスマが不在であり、イスラーム改革主義運動は近代的でビューロクラティックな志向性の強い組織によって担われたと論じている³⁶ (Otayek 1988)。

1990年代に入ると、スーフィー教団とイスラーム改革主義運動は同じ土俵で議論されるようになった³⁷。これらについては、多数の文献があるが、代表的な論集としてはブレンナーによる『サハラ以南アフリカにおけるムスリム・アイデンティティと社会変化』(Brenner 1993 (ed.))、トリオとデイビッド・ロビンソン(David Robinson)による『マラブーの時代——1880年から1960年までの仏領西アフリカにおけるイスラームの戦略と軌跡』(Robinson et Triaud (eds.) 1997)があげられる。

まず前者は、世俗化と合理化をわけ、世俗化に対立する合理化があるとする(Brenner 1993)。神秘主義と改革主義はともに世俗化に反対するが、改革主義は合理化をもとめ、神秘主義と対立するとまとめている。さらに、こうした合理化を希求する改革主義は、アフリカのイスラームではなく、中

32 こうした共同研究の代表的なものとしては、クルーズ・オブライアンとクーロンによる「黒アフリカにおけるイスラーム、社会、国家」(Islam, Société et État en Afrique noire; 1987-1992)、クルーズ・オブライアン、ブレンナー、ラスト、パーキンによる「現代アフリカにおけるイスラーム」(L'Islam dans l'Afrique moderne; 1987-1992)、ロビンソンとトリオによる「フランス植民地統治下のムスリム諸社会」(Muslim Societies under French Colonial rule; 1992-1996)などがある(Copans et al. 2012; Robinson et Triaud (eds.) 1997)。

33 この点については、本特集の「ムリッド教団の祭事における言説空間の形成——宗教的演説ワフターンの内容と形式に着目して」、および「西アフリカ・イスラーム研究の新潮流——教団、思想、言説的伝統」のIII「西アフリカのスーフィー教団研究」を参照。

34 クルーズ・オブライアン(Cruise O'Brien 1967)は、こうした研究の最も古いものである。フランス植民地統治の最初期の通時的な記述のほか、場当たり的な敵-友関係の連鎖のなかでイスラーム諸勢力と敵対/協調していたこと、統治のためにスーフィー教団の利用を行っていたこと、そのことによってカトリック宣教師から植民地行政が敵対的に捉えられる場面があったことを指摘している点で画期的である。この内容は、ハリソン(Harrison 1988)によって細部の記述がより詳細になったほか、トゥクロールではなくセレール、マンディンカ、ウォロフのムスリムを愛好していたことなどの植民地統治のあり方が個別のスーフィー教団の発展に影響を与えたこと(Robinson 1988)や、「黒イスラーム」論の歴史的な変遷などが明らかにされている(Triaud 2000, 2014)。

35 このような問題意識をさらに展開させ、セネガルのインフォーマル・セクターとムリッド教団との結びつきを示したものとして、小川(1998)があげられる。

36 オタイェク(Otayek 1988)の研究は、現在の水準からすると、適切なものとはいえない。より正確に表現すれば、カリスマの不在というよりも、植民地統治以前においてムスリム人口が稀薄で、スーフィー教団が社会的影響力のある組織として構成されていなかったこと、個別のイスラーム改革主義運動の組織の性格というよりも、アソシアシオンという組織のあり方が全体として受け入れられたことが重要な点である(中尾 2016a, 2017)。

37 イスラーム改革主義運動研究の系譜の詳細については、中尾(2016a)にまとめられている。

東・北アフリカのイスラームにもとめられることを指摘している。そして、世俗化と合理化のスペクトルは、のちにグローバル化と呼ばれることになる同時代の社会変化によって引き起こされているとする。

後者では、より西アフリカのコンテクストに寄りそった議論が構成されている³⁸ (Triaud 1997; Robinson 1997)。彼らが着目するのは、アマドゥ・バンバ (Amadou Bamba/ Aḥmad Bamba 1927 年没)、マールク・スイ (Mālik Sy, 1922 年没)、セイドゥ・ヌール・タル (Seydou Nourou Tall, 1980 年没)、イブラーヒーム・ニヤース (Ibrāhīm Niasse, 1975 年没)、ハマッラー (Cheikh Hamallah/Aḥmad Ḥamāh Allah, 1943 年没) などの「偉大なマラブー」たちが植民地統治期に出現していることである。この書のタイトルに掲げられた「マラブーの時代」とは植民地統治期のことを指している。

トリオは、植民地統治期のマラブーたちの活動を「抵抗」や「適応」にふりわけるとを退ける (Triaud 1997: 16)。植民地統治という非ムスリムによる統治のなかで、ジハードによるイスラーム国家とは異なる宗教実践が要請され、その結果としてカリスマが生じたとする (Triaud 1997: 21-22)。そのうえで、西アフリカの「カリスマの地理」として、南北と東西の基軸を示す。南北は、北側の乾燥したスーダン・サヘル気候帯にムスリムが多く、南側の森林地帯に非ムスリムが多いという宗教分布であり、こうした地理区分は植民地行政のイスラーム認識と政策とも対応し、北側のムスリムへの植民地行政の積極的な介入がみられたことを指摘している (Triaud 1997: 22-23)。他方で、東西は、西側のモーリタニアからセネガンビア、ギニアにいたる、仏領西アフリカのイスラームの中心地を構成する弧となっていることを示している (Triaud 1997: 23-24)。

フランス語圏の西アフリカ・イスラーム研究は、トリオの主宰していた『サハラ以南におけるイスラームと社会』誌 (*Islam et sociétés au sud du Sahara*, 発行期間 1987 年 -2004 年) を中心に展開し、同誌では個別の事例報告が多数蓄積された。おおまかにいえば、こうしたトリオに続くフランス語圏の西アフリカ・イスラーム研究は、指導者ないしは傑出した人物の個人の履歴を個別具体的に明らかにし、同時代のイスラームの状況を明らかにするという手法を共有している (Robinson et Triaud (eds.) 1997; Kane et Triaud (eds.)

1998; Gomez-Perez (ed.) 2005; Goerg et Pondopoulo (eds.) 2012)。これらの研究は、ほとんど手のつけられてこなかった西アフリカ各地の事例報告として貴重なものとなっている一方で、理論構築へと向かわなかったことも指摘できる。

まとめよう。西アフリカのイスラームについての人類学的研究は、スーフィー教団を中心に展開し、現在から遡るかたちで、植民地統治期へと関心を広げていった。他方で、フランス語の行政文書を扱う植民地史研究では、統治する側が能動的に働きかけ、統治される側が受動的に対応したといったような二分法では捉えられない植民地状況への関心が高まっていった。そうしたなかで、植民地史研究においても、イスラーム政策だけではなく、植民地統治期に信徒を拡大させたスーフィー教団へと関心が向かっていった。さらに、植民地統治後期に出現し、現在においても、スーフィー教団と対抗しうる勢力として展開していったイスラーム改革主義運動についても、人類学と植民地史研究、あるいは政治学の研究対象としてとりあげられるようになった。

このようにしてみると、1980 年代以降、それ以前とは問題意識の異なる、スーフィー教団とイスラーム改革主義運動の研究が出現するようになった。そこでは、植民地統治期のフランス語で書かれた行政文書を批判的に読みとくことで、植民地行政とムスリムとの葛藤や共存、同時代の政治経済状況の変化と連動したイスラーム改革主義運動やスーフィー教団が論じられることになり、2000 年代以降の多数の研究蓄積をもたらすことになったといえるだろう。

IV 結論

最後に、1990 年代までの西アフリカのイスラームを対象とした研究の流れを振り返りつつ、どのような研究の潮流が生まれていったのかを確認する。

18 世紀から 20 世紀初頭までの西アフリカ内陸のイスラームについての知見は、アラビア語文献に基づくオリエンタリストたちの文献学的な知識と、探検家たちによってもたらされた民族誌学的な知識とを組み合わせたものであった。しかし、こうした民族誌学的研究と文献学的研究の交流ないしは複合は、1910 年代ごろに頂点に達し、それ以降は西アフリカの

38 ロビンソン (Robinson 1997) は植民地統治期のイスラーム政策の時代区分などを示している。植民地統治期のイスラーム政策とスーフィー教団については、坂井 (2005, 2018, 2019) を参照。

イスラーム研究のなかではみられなくなっていった。実際のところ、このことの要因を明らかにする作業はいまだ必要とされている。しかし、西アフリカ内陸のアラビア語文献がヨーロッパ諸国のオリエンタリストたちのあいだであまり流通することがなくなったこと、また、植民地行政官を育成する専門教育機関の整備によってアラビア語のリテラシーをもった植民地行政官が出現しなくなったことが、その要因の一部として想定される。西アフリカのイスラーム研究に大きな影響を残したドラフォスのように、東洋語学校 (l'École spéciale des langues orientales) を卒業したのちに、植民地行政官となるといったキャリアが成立しにくくなったことは確かであろう。

1920年代以降は、オリエンタリストの伝統からは切り離された植民地行政官=民族誌家によるイスラーム研究が行われるようになった。こうした研究は、ムスリムの監視と管理という植民地統治にもとめられる情報の収集という側面が強かった。そのような関心に基づいて、ムスリム社会内部のヒエラルキーや有力なムスリムの政治的な影響力といった点に着目した研究がなされていた。しかし、それはアカデミックな問題設定というよりも、統治のための政策上の関心に基づくものであった。特に、仏領においてはスーフィー教団、英領においては王国・首長国が対象となって研究が蓄積されたことは、在来のイスラーム国家を容認するかどうかという点に関わっており、興味深い対照を示している。また、この時期の研究は同時代のひとつの記録として史料的な価値が高く、歴史研究の対象として再読される可能性をもっている。

転換が生じたのは、1950年代である。トリミングは、英仏語圏の双方によってなされた既存の研究を広範に活用しつつ、西アフリカにどのようにしてイスラームが定着していったのかをまとめあげた。これは、植民地行政官=民族誌家の研究からアカデミックな研究への転換をもたらす助走となったといえよう。こうしたトリミングの整理を踏まえつつ、レヴツィオン、ウィルクス、ハンウィック、ヒスケットなどの研究者が、西アフリカ内陸のアラビア語史料を丹念に「発掘」し、基礎的な情報をかためていった。こうした研究群に含まれるレヴツィオンやウィルクスの一部の著作には、民族誌学的研究が文献学的研究を補完するという両者の新たな結合をみることができる。また、この時期の研究は、1920年代ごろからあまり議論されることのなかったアラビア語の写本への関心を喚起し、2000年代後半以降のアラビア語やアジャミーの文書研究の急増を下支えしていたともいえるだろう。このようなアラビア語文献や口頭伝承の「発掘」に基づく歴史研究への傾倒は、脱植民地化や独立直後といった同時代の政治状況と関連して、西アフリカ諸国の大学に新たな知の拠点が形成され

ていくことと軌を一にしていた。

他方で、これらの研究は、西アフリカにおけるイスラームの定着と在来の諸社会との関係を中心に進められていったが、その研究の大枠のなかで、時として事例の報告に終始し、理論構築を行わなかった。また、独立後の機運とも関連して、植民地統治以前のイスラームに関心が集中し、植民地統治期あるいは独立以降のイスラームは等閑視されていたといえる。こうした限界は、1980年代以降の研究によって乗り越えられていった。

1980年代後半ごろから、植民地統治期、あるいは独立以後のイスラームに焦点をあてた研究が増加するようになる。これらの研究は、イスラーム政策、スーフィー教団、イスラーム改革主義運動といった隣接した研究対象を扱いつつも、異なる問題関心で進められた。1980年代後半から1990年代に、人類学、歴史学、政治学を巻き込んだ共同研究が組織され、それらに基づく論文集が出版されていくなかで、大きな潮流をつくりあげていった。

こうした研究のなかで、植民地統治以降のイスラームが対象とされることになった。しかし、こうした研究では、一般的に、植民地統治、あるいは独立以後の政治経済的なコンテキストが過度に強調されている。明示的に言及はされなかったが、バランディエの植民地状況の概念を踏まえた、諸アクターの絡み合いやせめぎあいとして、ムスリムの宗教的・政治的実践が捉えられるようになった。このような問題設定は、フランス語の行政文書に基づく植民地史研究だけではなく、人類学や政治学を巻き込むかたちで展開していった。その意味では、1990年代の西アフリカのイスラーム研究はひとつの達成を迎えたのである。

しかし、これらの研究は、アラビア語の史料に基づく研究とほとんど接合することがなく、植民地統治以前とそれ以降のイスラーム研究、イスラーム思想についての歴史学的研究と宗教実践の人類学的研究とのあいだに大きなギャップをもたらした。文献学的研究と民族誌学的研究はふたたび、分離してしまった。1900年代から1990年代までのおよそ100年のタイムスパンで考えると、アラビア語の写本を読みとく文献学的研究と同時代の民族誌的な事象を記録・分析する人類学的研究が時に深く結びつき、時に乖離しながら、西アフリカのイスラーム研究を進展させていったことがわかる。

本稿では、文献学的研究と民族誌学的研究の結合と乖離という観点から、同時代の政治的コンテキストを一定程度踏まえつつ、西アフリカ・イスラーム研究の学説史を整理してきた。そのなかで、西アフリカ・イスラーム研究が、植民地状況や独立直後の西アフリカの歴史と関連しながら進行してき

たことを副次的に示してきた。しかし、本稿では同時代のコンテキストはわずかに言及する程度に留まっており、独立後の西アフリカ諸国のなかでの研究はより本格的な研究が必要とされている。また、近い将来、1980年代以降の研究も、西アフリカ諸国における構造調整やグローバル化のコンテキストのなかで捉えなければならなくなるだろう。本稿は、学説史の整理であるだけでなく、西アフリカ・イスラーム研究からみた西アフリカ近現代史という視座も示している。

謝辞

本稿は、匿名の2名の査読者の詳細にわたるコメントによって大きく修正・改善された。深く御礼申し上げます。

参考文献

(日本語文献)

小川 了

1998 『可能性としての国家誌——現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社。

苅谷 康太

2012 『イスラームの宗教的・知的連関網——アラビア語著作から読み解く西アフリカ』東京大学出版会。

私市 正年

2004 『サハラが結ぶ南北交流』山川出版社。

グリオール、マルセルとジェルメーヌ・デitelラン

1986(1965) 『青い狐——ドゴン族の宇宙哲学』坂井信三(訳)、せりか書房。

グリオール、マルセル

1981(1948) 『水の神——ドゴン族の神話的世界』坂井信三・竹沢尚一郎(訳)、せりか書房。

坂井 信三

1985 「西アフリカのイスラーム受容の一側面——マンデ系諸民族におけるイスラーム教徒の非軍事的傾向をめぐって」『宗教的統合の諸相』白鳥芳郎・倉田勇(編)、pp. 15-52、南山大学人類学研究所。

1986 「訳者解説」『青い狐——ドゴン族の宇宙哲学』グリオール、マルセル・ジェルメーヌ・デitelラン(著)、坂井信三(訳)、せりか書房。

1987 「マンデ系イスラーム教徒の宗教的信条の特性について——ジャカンケの平和主義の宗教的・学問的背景をめぐって」『アカデミア 人文・社会科学編』45: 25-55。

2003 『イスラームと商業の歴史人類学——西アフリカの交易と知識のネットワーク』世界思想社。

2005 「西アフリカのタリーカと社会変動下の集団編成」『イスラームの神秘主義と聖者信仰』赤堀雅幸・東長靖・堀川徹(編)、pp. 204-228、東京大学出版会。

2018 「西アフリカのムスリム社会における宗教性と世俗性——セネガルとナイジェリアにおけるライシテとシャリーア」『アカデミア 人文・自然科学編』16: 49-68。

2019 「仏領西アフリカにおけるイスラーム教育改革の連続と断絶——セネガルとマリの三つの事例」『アカデミア 人文・自然科学編』17: 15-29。

嶋田 義仁

1988 「西アフリカ・イスラーム化パターンの3類型と「フルベ族の聖戦」——S. TRIMINGHAMの西アフリカ・イスラーム史論をめぐって」『アフリカ研究』33: 1-18。

1991 「西アフリカのイスラーム化と交易——Trimingham 説再論」『アフリカ研究』38: 75-85。

1995 『牧畜イスラーム国家の人類学——サヴァンナの富と権力と救済』世界思想社。

竹沢 尚一郎

1988 「西アフリカのイスラーム化にかんする一考察——歴史主義批判」『アフリカ研究』32: 19-43。

1989 「水の精霊」とイスラーム——ボゾ族における社会変化と宗教変化」『国立民族学博物館研究報告』13(4): 857-896。

1990 「ジハード史観を脱却すべきではないか——嶋田氏の批判に答える」『アフリカ研究』36: 31-43。

1999 「ボゾとは誰のことか」『民族学研究』64(2): 223-236。

2001 『表象の植民地帝国——近代フランスと人文諸科学』世界思想社。

2008 『サバンナの河の民——記憶と語りのエスノグラフィ』世界思想社。

中尾 世治

2016a 「解説」『ムスリム文化連合ヴォルタ支部史料集——ムスリム文化連合ヴォルタ支部の設立からムスリム協会までの50年について』(ボボ・ジュ

- ラソ、1962-2012)』I. K. マガネ(著)、田中樹・清水貴夫・遠藤仁(監修)、中尾世治(訳)、pp. 119-184、総合地球環境学研究所。
- 2016b 「植民地行政のイスラーム認識とその運用——ヴィシー政権期・仏領西アフリカにおけるホテル襲撃事件と事件の捜査・対応の検討から」『アフリカ研究』90: 1-13。
- 2017 「西アフリカ内陸における近代とは何か——ムフン川湾曲部における政治・経済・イスラームの歴史人類学」南山大学大学院人間文化研究科提出博士論文。
- 2018 『オート・ヴォルタ植民地におけるカトリック宣教師とイスラーム改革主義運動——植民地行政と宗教集団の教育をめぐる闘争』上智大学イスラーム研究センター。
- 2019 「歴史と同時代性——口頭伝承研究と歴史叙述のフロンティア」『アフリカで学ぶ文化人類学』松本尚之・佐川徹・石田慎一郎・大石高典・橋本茉莉(共編)、昭和堂。
- バランディエ、ジョルジュ
1983(1955) 『黒アフリカ社会の研究——植民地状況とメシアニズム』井上兼行(訳)、紀伊國屋書店。
- (外国語文献)
- Amselle, Jean-Loup et Emmanuelle Sibeud (eds.)
1998 *Maurice Delafosse. Entre orientalisme et ethnographie: l'itinéraire d'un africaniste, 1870-1926.* Maisonneuve & Larose.
- Austin, Allan
1997 *African Muslims in Antebellum America: Transatlantic Stories and Spiritual Struggles.* Routledge.
- Bâ, Amadou Hampâté et Marcel Cardaire
1957 *Tierno Bokar: le sage de Bandiagara.* Présence africaine.
- Bâ, Amadou Hampâté et Jacque Daget
1962(1955) *L'empire Peul du Macina. Vol. I, 1818-1853.* Mouton.
- Barth, Heinrich
1857-1858 *Travels and Discoveries in North and Central Africa: Being a Journal of an Expedition Undertaken under the Auspices of H.B.M.'s Government, in the Years 1849-1855.* 1-5 vol. Longman, Brown, Green, Longmans and Roberts.
- Batran, Abdal-Aziz
1979 The Kunta, Sīdī al-Mukhtār al-Kuntī, and the Office of Shaykh al-Tarīqa l-Qādiriyya. In *The Cultivators of Islam.* John Ralph Willis(ed.), pp. 113-146, Franc Cass.
- Binger, Louis-Gustave
1892 *Du Niger au golfe de Guinée.* t. I-II. Hachette.
- Brenner, Louis
1984 *West African Sufi: The Religious Heritage and Spiritual Search of Cerno Bokar Saalif Taal.* Hurst.
1993 Introduction : Muslim Representations of Unity and Difference in the African Discourse. In *Muslim Identity and Social Change in Sub-Saharan Africa.* Louis Brenner (ed.), pp. 1-20. Indiana University Press.
- Brenner, Louis (ed.)
1993 *Muslim Identity and Social Change in Sub-Saharan Africa.* Indiana University Press.
- Brévié, Jule
1923 *Islamisme contre 'Naturisme' au Soudan français: essai de psychologie politique, coloniale.* Ernest Leroux.
- Caillié, René
1830 *Journal d'un voyage à Temboctou et à Jenné dans l'Afrique centrale: précédé d'observations faites chez les Maures Braknas, les Nalous et d'autres peuples, pendant les années 1824, 1825, 1826, 1827, 1828.* T. 2. Imprimerie Royale.
- Cardaire, Marcel
1954 L'Islam et le terroir africain: études soudaniennes. Imprimerie du Gouvernement.
- Cooley, William
1966(1841) *The Negroland of the Arabs Examined and Explained: Or, An Inquiry Into the Early History and Geography of Central Africa.* Frank Cass.

- Copans, Jean
 1980 *Les marabouts de l'arachide: la confrérie mouride et les paysans du Sénégal*. Le Sycomore.
- Copans, Jean et al.
 2012 Donal B. Cruise O'Brien 1941-2012. Nécrologie. *Cahiers d'études africaines* 52(208): 735-740.
- Coulon, Christian
 1981 *Le marabout et le prince (Islam et pouvoir au Sénégal)*. Pedone.
 1983 *Les musulmans et le pouvoir en Afrique noire*. Karthala.
- Cruise O'Brien, Donal
 1967 Towards an 'Islamic Policy' in French West Africa, 1854-1914. *Journal of African History* 8(2): 303-316.
 1971 *The Mourides of Senegal: The Political and Economic Organization of an Islamic Brotherhood*. Clarendon Press.
 1975 *Saints and Politicians: Essays in the Organization of a Senegalese Peasant Society*. Cambridge University Press.
- Cruise O'Brien, Donal and Christian Coulon (eds.)
 1988 *Charisma and Brotherhood in African Islam*. Clarendon Press.
- Cuoq, Joseph
 1975 *Recueil des sources arabes concernant l'Afrique occidentale du VIIIe au XVIe siècle: Bilād al-Sūdān*. Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- Curtin, Phillip (ed.)
 1967 *Africa Remembered: Narratives by West Africans from the Era of the Slave Trade*. University of Wisconsin Press.
- Delafosse, Maurice
 1912 *Haut-Sénégal-Niger, tome II*. Emile Larose.
- Dilley, Roy
 2007 The Construction of Ethnographic Knowledge in a Colonial Context: The Case of Henri Gaden(1867-1939). In *Ways of Knowing: New Approaches in the Anthropology of Experience and Learning*. Mark Harris(ed.), pp. 139-157.
- Berghahn.
 Fisher, Allan and Humphrey Fisher (eds.)
 1970 *Slavery and Muslim Society in Africa: The Institution in Saharan and Sudanic Africa, and the Trans-Saharan Trade*. Hurst.
 1973 Conversion Reconsidered: Some Historical Aspects of Religious Conversion in Black Africa. *Africa* 43(1): 27-40.
 1985 The Juggernaut's Apologia: Conversion to Islam in Black Africa. *Africa* 55(2): 153-173.
- Gaden, Henri (trad.)
 1913 *Chroniques du Foûta sénégalais*. Ernest Leroux.
- Goerg, Odile et Anna Pondopoulo(eds.)
 2012 *Islam et sociétés en Afrique subsaharienne à l'épreuve de l'histoire: un parcours en compagnie de Jean-Louis Triaud*. Karthala.
- Gomez-Perez, Muriel (ed.)
 2005 *L'islam politique au sud du Sahara: identité, discours et enjeux*. Karthala.
- Harrison, Christopher
 1988 *France and Islam in West Africa, 1860-1960*. Cambridge University Press.
- Hiribarren, Vincent
 2013 A European and African Joint-Venture: Writing a Seamless History of Borno (1902-1960). *History in Africa* 40(1): 77-98.
- Hiskett, Mervyn
 1973 *The Sword of Truth: The Life and Times of the Shehu Usman dan Fodio*. Oxford University Press.
 1975 *A History of Hausa Islamic Verse*. SOAS.
 1984 *The Development of Islam in West Africa*. Longman.
- Hogben, Sidney John
 1930 *The Muhammadan Emirates of Nigeria*. Oxford University Press.
- Hogben, Sidney John and Anthony Kirk-Greene
 1993(1966) *The Emirates of Northern Nigeria: A Preliminary Survey of their Historical Traditions*. Gregg Revivals.

- Houdas, Octave Victor (trad.)
1900 *Tarikh es-soudan ou chroniques de Tombouctou*. Ernest Leroux,
1901 *Tedzkiret en-nisiān fi akhbār molouk es-soudān*. Ernest Leroux,
- Houdas, Octave Victor et Maurice Delafosse (trad.)
1913 *Tarikh el-fettach ou chronique du chercheur: documents arabes relatifs à l'histoire du Soudan*. Ernest Leroux.
- Hunwick, John
1966 Religion and State in the Songhay Empire, 1464-1591. In *Islam in Tropical Africa*. Ioan Lewis(ed.), p. 296-315. International African Institute in association with Indiana University Press.
1985 *Sharī‘a in Songhay: The Replies of al-Maghīlī to the Questions of Askia al-Hājī Muhammad*. Oxford University Press.
- Jones, Gwilym
1974 Social Anthropology in Nigeria during the Colonial Period. *Africa* 44(3): 280-289.
- Kaba, Lansiné
1974 *The Wahhabiyya: Islamic Reform and Politics in French West Africa*. Northwestern University Press.
- Kane, Ousmane
2016 *Beyond Timbuktu: An Intellectual History of Muslim West Africa*. Harvard University Press
- Kane, Ousmane et Jean-Louis Triaud (eds.)
1998 *Islam et islamismes au sud du Sahara*. Karthala.
- Kirk-Greene, Anthony
1980 *A Biographical Dictionary of the British Colonial Governor, Volume 1: Africa*. Hoover Institution Press.
- Last, Murray
1967 *The Sokoto Caliphate*. Longmans.
1980 Historical Metaphors in the Kano Chronicle. *History in Africa* 7: 161-178.
- Launay, Robert
1982 *Traders without Trade: Responses to Change in Two Dyula Communities*. Cambridge University Press.
- Lawler, Nancy
1996 Ivor Wilks: A Biographical Note. In *The Cloth of Many Colored Silks: Papers on History and Society Ghanaian and Islamic in Honor of Ivor Wilks*. John Hunwick and Nancy Lawler (eds.), pp. 5-14. Northwestern University Press.
- Levtzion, Nehemia
1968 *Muslims and Chiefs in West Africa: A Study of Islam in the Middle Volta Basin in the Pre-Colonial Period*. Clarendon Press.
1973 *Ancient Ghana and Mal* (Studies in African history 7) i. African Publishing Company.
1979b Patterns of Islamization in West Africa. In *Conversion to Islam*. Nehemia Levtzion (ed.), pp. 207-216. Holmes & Meier.
2000 Islam in the Bilad al-Sudan to 1800. In *The History of Islam in Africa*. Nehemia Levtzion and Randall Pouwels (eds.), pp. 63-91. Ohio University Press.
- Levtzion, Nehemia (ed.)
1979a *Conversion to Islam*. Holmes & Meier.
- Levtzion, Nehemia and Humphrey Fisher (eds.)
1987 *Rural and Urban Islam in West Africa*. L. Rienner Publishers.
- Levtzion, Nehemia and John Hopkins (eds. and trans.)
1981 *Corpus of Early Arabic Sources for West African History*. Cambridge University Press.
- Lewis, Ioan (ed.)
1966 *Islam in Tropical Africa*. Oxford University Press.
- Lovejoy, Paul
1980 *Caravans of Kola: The Hausa Kola Trade, 1700-1900*. Ahmadu Bello University Press.
1983 *Transformations in Slavery: A History of Slavery in Africa*. (African Studies Series 38). Cambridge University Press.
2005 *Slavery, Commerce and Production in West Africa: Slave Society in the Sokoto Caliphate*. Africa World Press.

- Lydon, Ghislaine
 2009 *On Trans-Saharan Trails: Islamic law, Trade Networks, and Cross-Cultural Exchange in Nineteenth-Century Western Africa*. Cambridge University Press.
- Malon, Claude
 2000 Gilbert Vieillard: administrateur et ethnologue en Afrique occidentale. *Cahiers de sociologie économique et culturelle, ethnopsychologie* 33: 119-122.
- Marty, Paul
 1920-1921 *Études sur l'Islam et les tribus du Soudan* T. I-IV. Ernest Leroux.
 1921a *Études sur l'Islam et les tribus maures: les Brakna*. Ernest Leroux.
 1921b *L'Islam en Guinée : Fouta-Diallon*. Ernest Leroux.
 1922 *Études sur l'Islam en Côte d'Ivoire*. Ernest Leroux.
 1930 *L'Islam et les tribus dans la colonie du Niger*. P. Geuthner.
- McDougall, Anna
 1983 The Sahara Reconsidered: Pastoralism, Politics and Salt from the Ninth through the Twelfth Centuries. *African Economic History* 12: 263-286.
- McDougall, James and Judith Scheele (eds.)
 2012 *Saharan Frontiers: Space and Mobility in North West Africa*. Indiana University Press.
- Moraes Farias, Paulo de
 1967 The Almoravids: Some Questions Concerning the Character of the Movement. *Bulletin de l'IFAN*, série B 29: 794-878.
 2003 *Arabic Medieval Inscriptions from the Republic of Mali: Epigraphy, Chronicles, and Songhay-Tuareg History*. Oxford University Press.
 2006 Barth, le fondateur d'une lecture réductrice des Chroniques de Tombouctou. In *Heinrich Barth et l'Afrique*. Mamadou Diawara, Paulo Fernando de Moraes Farias and Gerd Spittler (eds.), pp. 215-224. Rüdiger Köppe Verlag.
 2008 Intellectual Innovation and Reinvention of the Sahel: The Seventeenth-Century Timbuktu Chronicles. In *The Meanings of Timbuktu*. Shamil Jeppie and Suleymane Bachir Diagne (eds.), pp. 95-107. HSRC Press.
- Moraes Farias, Paulo de and Benedetta Rossi
 2018 Interview. Landscapes, Sources, and Intellectual Projects. In *Landscapes, Sources and Intellectual Projects of the West African Past*. Toby Green and Benedetta Rossi (eds.), pp. 498-516. Brill.
- Monteil, Charles
 1903 *Soudan français: Monographie de Djénné, cercle et ville*. Imprimerie de Jean Mazeurie.
 1971 *Une cité soudanaise: Djénné, métropole du delta central du Niger*. 2e éd. Institut International Africain.
- Monteil, Vincent
 1980(1964) *L'Islam noir: une religion à la conquête de l'Afrique*. 3e éd. Éditions du Seuil.
- Ngom, Fallou
 2009 Aḥmadu Bamba's Pedagogy and the Development of 'Ajamī Literature. *African Studies Review* 52(1): 99-123.
- Nobili, Mauro
 2016 A Short Note on Some Historical Accounts from the IFAN Manuscripts Collection. *History in Africa* 43: 379-388.
- Nobili, Mauro and Mohamed Shahid Mathee
 2015 Towards a New Study of the So-Called Tārīkh al-fattāsh. *History in Africa* 42: 37-73.
- Otayek, René
 1988 Muslim Charisma in Burkina Faso. In *Charisma and Brotherhood in African Islam*. Donal Cruise O'Brien and Christian Coulon(eds.), pp. 91-112. Clarendon Press.
- Palmer, Richmond
 1908 The Kano Chronicle. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 38: 58-98.
 1936 *The Bornu Sahara and Sudan*. John

- Murray.
1967(1928) *Sudanese Memoirs: Being Mainly Translations of a Number of Arabic Manuscripts Relating to the Central and Western Sudan.* Frank Cass.
- Park, Mungo
1815 *The Journal of a Mission to the Interior of Africa, in the Year 1805: Together with Other Documents, Official and Private, Relating to the Same Mission: To Which Is Prefixed an Account of the Life of Mr. Park.* John Murray.
- Person, Yves
1968 *Samori: une révolution dyula.* T. I. IFAN.
1970 *Samori: une révolution dyula.* T. II. IFAN.
1975 *Samori: une révolution dyula.* T. III. IFAN.
- Pondopoulo, Anna
2002 À la recherche d'Henri Gaden (1867-1939). *Islam et sociétés au sud du Sahara* 16: 7-33.
- Robinson, David et Jean-Louis Triaud (eds.)
1997 *Le temps des marabouts. Itinéraires et stratégies islamiques en Afrique Occidentale Française v.1880-1960.* Karthala.
- Robinson, David
1988 French 'Islamic' Policy and Practice in Late Nineteenth-Century Senegal. *Journal of African History* 29(3): 415-435.
1997 Conclusion: Muslim Societies in a Secular Space. In *Le temps des marabouts. Itinéraires et stratégies islamiques en Afrique Occidentale Française v.1880-1960.* David Robinson et Jean-Louis Triaud (eds.), pp. 559-575. Karthala.
- Rougier, F.
1930 L'Islam à Banamba. *Bulletin du Comité d'études historiques et scientifiques de l'Afrique occidentale française* 13: 217-263.
- Saint-Père
1929 Création du royaume du Fouta-Djallon. *Bulletin du Comité d'études historiques et scientifiques de l'Afrique occidentale française* 12: 484-555.
- Sanneh, Lamin
1979 *The Jakhanke: The History of an Islamic Clerical People of the Senegambia.* International African Institute.
- Saul, Mahir
2006 Islam and West African Anthropology. *Africa Today* 53(1): 3-33.
- Smith, H. F. C.
1961 A Neglected Theme of West African History: The Islamic Revolutions of the Nineteenth Century. *Journal of the Historical Society of Nigeria* 2(1): 169-185.
- Soares, Benjamin
2000 Notes on the Anthropological Study of Islam and Muslim Societies in Africa. *Culture and Religion* 1(2): 277-285.
2014 The Historiography of Islam in West Africa: An Anthropologist's View. *Journal of African History* 55(1): 27-36.
- Souag, Lameen
2010 Ajami in West Africa. *Afrikanistik online* 2010: 1-11. https://eprints.soas.ac.uk/13429/1/Ajami_PDF.pdf
- Stewart, Charles
1976 Southern Saharan Scholarship and the Bilad al-Sudan. *Journal of African History* 17(1): 73-93.
- Tamari, Tal and Dmitry Bondarev
2013 Introduction and Annotated Bibliography. *Journal of Qur'anic Studies* 15(3): 1-55.
- Tamari, Tal
2001 Notes sur les représentations cosmogoniques dogon, bambara et malinké et leurs parallèles avec la pensée antique et islamique. *Journal des africanistes* 71(1): 93-111.
- Tayob, Abdulkader
2004 John Spencer Trimingham on Islam in Africa: Integrative or Isolationist? In *European Traditions in the Study of Religion in Africa.* Frieder Ludwig, Afeosemime Unuose Adogame, Ulrich Berner, and Christoph Bochinger(eds.), pp.

237-244. Harrassowitz Verlag.

Triaud, Jean-Louis

- 1997 Introduction. In *Le temps des marabouts. Itinéraires et stratégies islamiques en Afrique Occidentale Française v.1880-1960*. David Robinson et Jean-Louis Triaud (eds.), pp. 11-29. Karthala.
- 2000 Islam in Africa under French Colonial Rule. In *The History of Islam in Africa*. Nehemia Levtzion and Randall Pouwels (eds.), pp. 169-188. Ohio University Press.
- 2014 Giving a name to Islam South of the Sahara: An Adventure in Taxonomy. *Journal of African History* 55(1): 3-15.

Trimingham, John Spencer

- 1959 *Islam in West Africa*. Clarendon Press.
- 1962 *A History of Islam in West Africa*. Glasgow University Publications.

van Beek, Walter

- 2004 Haunting Griaule: Experiences from the Restudy of the Dogon. *History in Africa* 31: 43-68.

Vieillard, Gilbert

- 1937 Poèmes peuls du Fouta-Djallon. *Bulletin du Comité d'études historiques et scientifiques de l'Afrique Occidentale Française* 20: 225-311.

Wilks, Ivor

- 1961 The Northern Factor in Ashanti History: Begho and the Mande. *Journal of African History* 2(1): 25-34.
- 1968 The Transmission of Islamic Learning in the Western Sudan. In *Literacy in Traditional Societies*. Jack Goody(ed.), pp. 162-197. Cambridge University Press.
- 1989 *Wa and the Wala: Islam and Polity in Northwestern Ghana*. Cambridge University Press.
- 2000 The Juula and the Expansion of Islam into the Forest. In *The History of Islam in Africa*. Nehemia Levtzion and Randall Pouwels(eds.), pp. 93-116. Ohio University Press.
- 2011 Al-Hajj Salim Suwari and the Suwarians: A Search for Sources. *Transactions of the Historical Society of Ghana*, New series 13: 1-79.

Wilks, Ivor, Nehemia Levtzion and Bruce Haight

- 1986 *Chronicles from Gonja: A Tradition of West African Muslim Historiography*. Cambridge University Press.
- 1985 *Slaves and Slavery in Muslim Africa*. V.I-II. Franc Cass.

Willis, John

- 1971 The Historiography of Islam in Africa: The Last Decade (1960-1970). *African Studies Review* 14(3): 403-424.
- 1989 *In the Path of Allah: 'Umar, an Essay into the Nature of Charisma in Islam*. Frank Cass.

Willis, John (ed.)

- 1979 *The Cultivators of Islam* (Studies in West African Islamic History 1). Franc Cass.

Whitcomb, Thomas

- 1975a New Evidence of the Origins of the Kunta—I. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 38(1): 103-123.
- 1975b New Evidence of the Origins of the Kunta—II. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 38(2): 403-417.

The Connection and Disconnection between Historical and Ethnographical Studies: The Transition of the Studies of Islam in West Africa up to the 1990s

Seiji NAKAO*¹
Tomoki IKEBE*²
Takanori SUENO*³
Sohta HIRAYAMA*⁴

This paper reviews the history of studies on Islam in West Africa. We divide its history—from the 18th century to the 1990s—into four periods. Up to the 1910s, philological studies were linked to ethnographic studies, but from the 1920s these two disciplines separate. From the 1950s, academics replaced the research carried out by the administrator-ethnographer. The new academic scholars “discovered” the new historical materials written in Arabic, as well as the oral traditions of West Africa. Since the 1980s, a number of joint research projects have been organized. These cross-over between the study of colonial history and the study of the history of Islam. This includes the Sufi brotherhood and the Islamic reformist movement, both of which have become common research subjects. In contrast, philological and historical studies, based on documents written in Arabic, have been reduced to a minor genre. They have also completely lost the link with ethnographic studies. While the colonial period has been a prominent topic for historical research, the history of studies itself could be the subject of the historical studies on Islam in West Africa.

Keywords:

West Africa, Islam, Anthropology of Islam, research history

*¹Research Institute for Humanity and Nature

*²Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

*³Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

*⁴Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University